

九州大学 大学史料室ニュース

第22号

2003. 10. 31.

目 次

追想 受験機会の複数化入試における合格者 数水増し計算……………	2
東北大学における「大学アーカイブ」……………	4
九州大学史料収集・保存に関する委員会名簿…	6
九州大学大学史料室名簿……………	6
受贈図書一覧……………	6
大学史料室日誌抄録……………	8



1928年（昭和3）頃の箱崎キャンパス

1932年（昭和7）、農学部を卒業された故惣津律士氏所蔵のアルバム『K-I-U-1932』（Kyushu Imperial University 1932）の中の1枚である。アルバムは御子息惣津義雄氏より、先年大学史料室に寄贈された。1932年のアルバムに貼られているが、海岸線や構内建物の配置等から1928年（昭和3）頃のものとして推定される（左下の応用化学教室〈1927年10月竣工〉は現存）。箱崎キャンパスとその近辺の、典型的な白砂青松、長汀曲浦の景観がわかる貴重な航空写真である。

追想 受験機会の複数化入試における合格者数水増し計算

楠 浩一郎

最近、大学入試は全く多様化しているが、そのさきがけが昭和62、63年、平成元年に渡り行われた受験機会の複数化入試だった。この入試改革については、昭和60年から、国立大学協会で検討が始まったが、時の九大田中健蔵学長は、東大、京大の学長などと共に、改革の推進役だった。昭和61年4月には、国立大学協会入試改善特別委員会の委員長として、昭和62年度入試から、複数化入試を実施することを決定された。

国大協の討議の進行に合わせて、九大では入学試験検討特別委員会を作り、学長を支えていた。当時、工学部評議員だった私は、3月に長谷川修学部長の指名で、入試には不案内のまま、委員に就任した。そして、5月、改革は実施されることになった。

新方式の入試は、全国公立大学をA、B二組に分け、受験生は、A、B各組より1大学ずつを選択、受験する。そして、両大学の合格者発表後、入学大学を決める。当然、両大学に合格する受験生がおり、入学辞退者が出るので、その分、予め合格発表者を水増ししておく必要がある。その推算が各大学にとって難題であった。判断の材料は、公式には、受験生の併願大学名と、共通一次試験の得点、九大二次試験の得点、出身地、出身高校と高校卒業年次などに過ぎない。しかし、至急合格者水増し推算法を定め、実行しなければならなかった。

九大での具体案の検討は、5月から始まった。工学部では、入試担当委員会で、各学科で検討を始めることになり、6月に、意見を聞いた。その

時化学機械工学科から、プロセス制御担当の松山久義教授の方式が提案された。結局、実行案となりうるものは、他に無く、7月、青木和男工学部長に全学がこの案で実行することになる可能性の了解を得て、全学特別委員会に提出した。8月、その専門委員会で、中央計数施設の大槻説乎次長の、これだと計算出来ますねという判定があり、実施案の検討に入ることになった。

松山教授による選好要素関数による計算の基礎式は、次の式である。

$$E = A \times B + C \times D$$

$$C = 1 - A$$

ここで、

E：九大に合格した者が、九大に入学する確率

A：併願大学への合格率

B：九大と併願大学の双方へ合格したときに、九大に入学する確率

C：併願大学不合格率

D：九大に合格、併願大学に不合格のときに、九大に入学する確率

Aは、共通一次試験の得点Xのみから推算しなければならない。そんなことは不可能なので、受験産業が公表するデータを利用した。大学入試センターは、試験後直ちに模範解答を公表し、受験生の自己採点に資した。各受験産業は、所属する受験生の得点から、その志望大学・学部・学科の合格率を予測し、この志望区分ごとに各志望者の得点と合格率を図として公表していた。

複雑なのは、B、両大学に合格したとき九大に来る確率の予測（参考のため、入試終了後分った実際の九大入学率を表1に示した）。これを大学



合格発表風景（昭和62年3月18日）

表1 併願大学合格者の九大入学率

併願大学	入学率	併願大学	入学率
北大	0.41	東工大	0.12
東北大	0.64	電気通信大	0.58
筑波大	0.69	東京農工大	0.76
千葉大	0.41	横浜国大	0.80

としての好ましさを表す選好要素 b_1 と学部・学科の好ましさを表す選好要素 b_2 で表し、さらに b_1 を、大学のランクや知名度から見た好ましき b_{11} と受

験生の住所から見た大学所在地の好ましさ b_{12} で表す。

これら各 b の値は、0～1とし、九大関連事項と併願大学関連事項を比較し、九大の方が好ましいほど、 b は大きく取る。必ず九大に来る場合が1、通っても来ない場合が0、五分五分のときは0.5である。そして b_1 、 b_2 と B の関係と、 b_{11} 、 b_{12} と b_1 の関係は、数表として用意する（例えば b_1 が0.3、 b_2 が0.8のとき B は0.6というように数値を示した表）。各 b の値は、各学部・学科で予め用意する。各大学学部・学科のランクは、受験産業が、過去の合格者平均点の表として、公表していた。各 b の値の決定がこの方法の精度を決めることになる。

これらについては、大学史料室の資料（楠浩一郎、松山久義著：入学試験合格者数計算法）に詳しい。

必要合格者数の計算は、学部・学科毎に、志望者各個人の E を、二次試験の得点順に、基準定員の値まで加算して行う。ただし実際に合格発表する数は、各学部・学科の委員が、この計算値を基に、独自に調整して定める。

9月、全学入試特別委員会で、この方法で実施することを決定、未知の A 、 B 、 D を定めるために代々木ゼミナール、福武書店、旺文社を訪問、協力を要請した。一方で、計算を実施する九大計数施設とは、終始打ち合わせ、協議を行った。責任ある協力を頂いた。

しかし、いざ実施するととなると、結果判定の責任は、受験生募集母体である学部・学科の委員にある。11月末、方法に見通しがついた時点で、全学説明講習会を開いた。

2月、入学願書と共通一次試験成績が出揃った時点で、模擬計算を実施。ところが、工学部では、学科間の志望順位による合格者数判定法に改定の手落ちがあることが判明。瀬口博巳入試課長の立会いの下、大槻計数施設次長に改定の了解を得て、事なきを得たが、この件は急遽臨時に、全学入試委員会を開き、その了解が必要だった。

3月、いよいよ本番の九大合格者数計算の時が来た。しかし計算の最終チェックが必要だと痛感。学内委員会への結果の開示の前日、日曜日、一人で入試課に出かけて、計算表の全数チェックを行った。終わって、瀬口課長と二人ほっとしたことを覚えている。

しかし、問題は合格者の入学手続き者数。手続き締め切りの日は、朝から入試課長室に詰めて、

緊張が続いた。初めてのことで、全く見当もつかなかったが、定員2434名に対し、過剰95名、不足7名で、過不足率4.1%、好結果を得られた（具体例を表2に示した）。

次年度、昭和62年度の前半は、全学担当委員に参加してもらって、結果の見直しを行った。 A と各 b 、 D について、実績を基に、妥当性を探り、修正、計算機に掛けて次年度に備えた。この修正計算による62年入試結果の過不足数は、+77名、-5名で、過不足率は3.6%に向上した。

表2 入学手続き過不足数（合格者算定の妥当性）

学部・学科	基準定員	過不足数
文学部	167	-2
法学部	265	0
経済学部経済系学科	195	12
理学部物理学科	73	4
医学部	120	23
工学部電気系学科	186	1
工学部機械系学科	167	4
農学部	276	11

昭和63年の入試には、この修正計算を適用し、良好な結果を得ることが出来た。

私はこの年、停年退官したが、この方法の入試は、平成元年が最後になった。その主要な原因は、受験生が志望2大学を選択する基準として、全国公立大学を A 、 B 2グループに分類していた。京大は A グループ、東大は B グループであった。これだと京大志望者には、東大の併願者が多く、東大合格者はほとんど東大に行く。京大には、地盤沈下は避けられないという危機感が生じた。あるとき京大若手教授から、「複数化入試は、九大学長が、国大協の委員長で決めたんだろう。けしからん」と言われたことがあった。かといって、東大、京大を同じグループにすると、受験生のチャンスを奪うことになり、改革の趣旨に反する。結局主要大学の入試は分離分割方式に移行することとなった。

九大の計算の成功は、入学試験は、教育の入り口、きちんとやりたいという関係者全員の意識によると思う。しかし、中でも、全く初めての方式の入試を、最善の方法でという、瀬口博巳入試課長の強力な推進なしには覚束なかった。特に記したい。

なお、最後に多年数理統計学者として、入試にも広く関与されていた理学部工藤昭夫教授が、停年に際し、九大広報に残された言葉を挙げさせて

頂きたい。

「私にとって精神的にも肉体的にも、最も辛かったことは次の二つです。・・第二は国立大学受験機会の複数化のときの合格者数を算定する仕事に

従事したときです。現名誉教授である楠浩一郎先生無しではどんなことになったか今でもぞっとします」。

(九州大学名誉教授)

東北大学における「大学アーカイブ」

永田英明

「記念資料室」から「史料館」へ

東北大学史料館の所在する片平キャンパスは、仙台市内では数少ない近代建築が遺るエリアとして、市民の注目を集めている。なかでも公開施設として市民に開放されている史料館は、間もなく百周年を迎えようとする東北大学の「顔」の一つとして知られている。東北大学のホームページを開いても、トップページには「東北大学史料館」が登場してくる。

現在の「史料館」は、旧東北帝国大学附属図書館本館（1925年竣工）を利用し活動している。専有面積は本館内に約850㎡で、ほか別棟に200㎡程度の収蔵スペースがある。その前身となる「東北大学記念資料室」は『東北大学五十年史』の編纂を契機に1963年に発足した組織で、「史料館」はこれを引き継ぐ形で2000年12月に発足した。

日本の大学アーカイブの先駆けとして評価されることが多い「記念資料室」を2000年に至って「史料館」と名称変更した目的は、大学自身の「アーカイブ」としての性格をこれまで以上に明確にする、という点に尽きる。それは全学的な組織改革の一環として行われたものだが、同時に、情報公開法施行に伴う大学行政文書の管理システムの改

変も重要な契機であった。「東北大学行政文書管理規程」等の制定によって、保存年限を満了した事務局行政文書（公文書）の評価選別・受入機関として位置づけられたのである。組織自身の産み出す記録を保存・公開することに「アーカイブ」の本質があるとすれば、この改変は「史料館」を東北大学の「アーカイブ」として性格づける上で、極めて重要な意味を持つものと言えよう。史料館発足後2年以上を経過した現在、移管文書の数は、徐々にではあるが確実に増えつつある。もっとも史料館自身の文書選別・受入・公開体制はまだ極めて不十分であり、そのための基盤整備は大きな課題として残されている。

史料館の「史料」

「東北大学史料館」の発足とはほぼ時を同じくして、京都大学では「大学文書館」が設置された。一方東北大学では「文書館」ではなく「史料館」という名称を採用した。それは、「記念資料室」以来の史料収集・保存方針をも意識した結果である。「記念資料室」の史料収集は、規定上は公文書も収集することになっていたが、実態としては明らかに「個人史料」が中心であった。また収集する史料の形態も、いわゆる「文書」に限られない。実験器具・測定装置などの教育研究機器、教官肖像画などの美術史料、解体された建物の部材などといったいわゆる「モノ」史料についても、東北大学自身の史料として意味を持つ限り、可能な範囲で収集を行っていたのである。

東北大学では1998年に総合学術博物館が発足し、大学博物館の開館準備が進められている。「史料館」への転換に際してもこの博物館との関係のあり方が検討課題となった。しかし史料収集のあり方について言えば、いわゆる「モノ」史料を史料館の収集対象から外すことはなかった。大学が収集した学術標本の保存利用を目的とする博物館と、大



東北大学史料館

学の活動記録そのものの保存公開を目的とする史料館の間にはその目的理念に違いがあり、大学史にかかわる「モノ」史料に関してはなお史料館が独自の役割を果たす余地があると考えたからである。無論両者の間には重なり合う部分もあるが、両者の性格・役割の相違をふまえた上で、協力関係を構築していけば良い、という立場に立っている。

その一方、大学が学術研究資料として収集した「文書」を保存管理の対象とすることは、全く検討の対象とはならなかった。東北大学にも学術資料として収集された古文書が多数存在し、附属図書館や各部局において管理されている。こうした古文書の保存と公開は、ある意味では自治体文書館、地域アーカイブにおける民間史料の収集保存・公開活動に通じるものと言えよう。しかし東北大学史料館がこうした文書を収集保存することは、現実に困難であると同時に、理念的に見ても無理があった。

史料館が「民間史料」を全く収集しないわけではない。旧教職員や卒業生などから寄贈されたいわゆる「個人史料」は、まぎれもなく民間史料＝私文書である。しかしその場合も、あくまで「大学に関わる史料群」であることが前提である。史料館の「個人史料」は、数点程度の小規模な史料群がほとんどであるが、大型の史料群が一括して寄贈されるケースもある。また、寄贈者の側で史料館への寄贈を積極的に希望しているケースも決して少なくない。「記念資料室」発足以来の史料収集において、こうした「寄贈する側」の意識は、決して無視することができないものとなっている。もっともこうした形での寄贈史料は、どちらかといえば「記念品」的なものに偏りがちである。こうした点をどのように調整していくかが、課題となろう。

大学情報の発信と「史料館」

史料館では、集積した史料情報を学内外に発信する手段として、展示活動、「東北大学史料館だより」や史料目録の刊行、さらにはインターネット上での情報発信などを行っている。なかでも展示活動は、史料館の活動の柱の一つである。館内では本館2階の380㎡程度を常設展示室にあて、東北大学や旧制第二高等学校等に関する歴史展示を行い、また大学の歴史を様々な角度から切り取った特定テーマの企画展も毎年開催している。たとえば2002年春には、東北大学の創成神話の一つとしていまでもよく持ち出される、大正2年の「女



常設展示室

子入学」事件を中心に、「東北帝国大学と女子学生」展と題する企画展を行った。また1998年には、江沢民中国国家主席の来学を契機に、仙台医学専門学校留学時代の魯迅(1881-1936)をテーマとした「東北大学と魯迅」展を開催した。このときは5日間で6000人以上もの来館者があり、その後も魯迅関係史料は「史料館」展示室の目玉コーナーとなっている。

アーカイブにとって、展示活動は必ずしも本質的・中核的な業務ではない。展示に追われ史料の受入・公開が停滞するという状況は、少なくともアーカイブのあり方としては望ましいものではないであろう。しかし一方で展示がアーカイブの史料収集・史料研究活動を公表する一つの重要な機会となり得ることも事実である。また大学アーカイブの展示は、大学そのものにとってもきわめて効果的な情報発信の機会でもあり、全学的な展示企画を担当することも少なくない。こうした取り組みについても、引き続き継承していくこととなろう。

「記念資料室」発足から40年を経た現在、「史料館」の存在・必要性は、学内でも一応の認知を得ているかにみえる。大学運営や研究に関する調査のために、さらには先祖さがしや「自分史」の調査等のために、史料館が情報提供を行う機会は確実に増えている。しかし片平キャンパスと他のキャンパスの地理的な関係もあって学生の間での知名度は必ずしも高いとは言えず、学生の大学に対するアイデンティティの形成という面では、必ずしも十分な機能を発揮していない。九州大学大学史料室が率先して取り組んできた、大学論、自校史をテーマとした教育活動などは、東北大学でも今後取り組んでいくべき課題の一つであろう。このほか、本格的な大学アーカイブとしての整備

はまだこれからの課題であり、取り組むべき課題は多い。そうした中で、九州大学ほか各大学の文書館・史料室とのつながりは、方向性を模索する上で、私たちにとって重要な意味を持っている。

大学が個性化と競争の時代を迎えつつある現在、大学アーカイブがどのような基本的機能を共有す

る必要があり、そのうえでどのような個性をお互いに持ちうるのか。東北大学史料館の活動が、「大学アーカイブ」の一つのあり方として参考となるのであれば幸いである。

(東北大学史料館研究員)

九州大学史料収集・保存に関する委員会名簿

委員長	副学長	有川 節夫	委員	工 院 教授	渡邊公一郎
副委員長	人環院 教授	新谷 恭明	〃	農 院 教授	村田 武
委員	人文院 助教授	佐伯 弘次	〃	総 院 教授	松永 信博
〃	比文院 教授	有馬 學	〃	応 研 助教授	広瀬 直毅
〃	言文院 助教授	鈴木 敦典	〃	博 物 館 教授	岩永 省三
〃	理 院 助教授	粕谷 英一	〃	総 務 部 部長	安間 敏雄
〃	医 院 教授	野瀬 善明			
〃	医 院 教授	笹栗 俊之			

(2003年10月1日現在)

九州大学大学史料室名簿

室 長	副学長	有川 節夫	兼 任	経 院 教授	荻野 喜弘
副室長	人環院 教授	新谷 恭明	〃	石 炭 研 教授	東定 宣昌
専 任		折田 悦郎	事務官		片山 昌彦
兼 任	人文院 助教授	佐伯 弘次	事務補佐員		松尾 陳代
〃	比文院 教授	有馬 學	〃		筑紫 啓子
〃	法 院 教授	植田 信廣			
〃	法 院 助教授	熊野 直樹			

(2003年10月1日現在)

受贈図書一覧 (2003年1月～2003年6月)

大学で教育と文化を語る 山住正己 1995. 8	松の実 第28号、第32号～第35号、Vol.36～Vol.37 九州大学女子卒業生の会「松の実会」事務局
世界の心臓学を拓いた田原淳の生涯 須磨幸蔵・島田宗洋・島田達生編著 2003. 5	1993. 9、1997. 9、1998. 9、1999. 11、 2000. 11、2001. 10、2002. 10
福岡市指定有形文化財 九州大学西新外国人教師 宿舍第3号棟修理工事報告書 九州大学 2003. 3	九州大学化学研究部 部報 New Chemi 第3号 九州大学共用施設内 化学研究部 2003. 4
九州大学講演集 緑風 -RYOKU FU- 九州大学企画広報室 2003. 3	基礎個体電子論 西村久 2003. 5
九州大学医学部百周年記念写真集 1903～2003 九州大学医学部百周年記念写真集編集委員会 2003. 3	先天性心疾患手術書 安井久喬 2003. 4
九州大学同窓会連合会会報 第8号 九州大学同窓会連合会事務局 2003. 3	北海道大学125年史編集室だより 第6号 北海道大学125年史編集室 2003. 3
	東北大学百年史 四 部局史一 東北大学百年史編集委員会 2003. 5

- 東北大学史料館所蔵 東北大学関係写真目録
東北大学史料館 2003. 3
- 東北大学史料館 TOHOKU UNIVERSITY ARCHIVES
東北大学史料館 2003. 3
- 東京大学史紀要 第二一号
東京大学史料の保存に関する委員会 2003. 3
- 東京大学史史料室ニュース 第29号～第30号
東京大学史史料室 2002. 11、2003. 3
- 金沢大学資料館紀要 第3号
金沢大学資料館 2003. 3
- 金沢大学資料館だより 第20号～第21号
金沢大学資料館 2002. 11、2003. 2
- 名古屋大学大学史資料室ニュース 第14号
名古屋大学大学史資料室 2003. 3
- 名古屋大学史紀要 第十一号
名古屋大学大学史資料室 2003. 3
- 名大史ブックレット6 草創期の名古屋大学と初代総長渋沢元治
神谷智著 名古屋大学博物館・名古屋大学大学史資料室編 2003. 3
- 名大史ブックレット7 名大祭—四〇年のあゆみ—
山口拓史著 名古屋大学大学史資料室編 2003. 3
- 「開かれた大学」とこれからの文書資料管理・情報公開—平成13年度 名古屋大学大学史資料室公開シンポジウム報告書—
名古屋大学大学史資料室 2002. 12
- 名古屋大学大学史資料室保存資料目録 第3集
名古屋大学大学史資料室 2003. 3
- 京都大学大学文書館だより 第4号
京都大学大学文書館 2003. 4
- 広島大学史紀要 第5号
広島大学五十年史編集室 2003. 3
- 大学組織の再構築 第29回(2001年度)研究員集会の記録 高等教育研究叢書71
広島大学高等教育研究開発センター 2002. 11
- コリーダ 34号
広島大学高等教育研究開発センター 2002. 10
- 人文論集 第38巻 第1号～第3・4号
神戸商科大学学術研究会・神戸商科大学経済研究所 2002. 9、12、2003. 3
- 福岡県立大学10年誌
福岡県立大学10年誌編集委員会 2003. 3
- 宮城学院資料室年報『信・望・愛』2002年度 第9号
宮城学院資料室運営委員会・宮城学院資料室 2003. 3
- 駒澤大学百二十年史
駒澤大学開校百二十年史編纂委員会 2003. 3
- 拓殖大学百年史研究 11号
拓殖大学日本文化研究所附属近現代研究センター 2002. 12
- サティア《あるがまま》 第49号
東洋大学井上円了記念学術センター 2003. 1
- 成瀬記念館 2001・2002 No. 17
日本女子大学成瀬記念館 2002. 12
- 武蔵野美術大学年報 1999～2001(平成11～13)年度版
大学史史料委員会・大学史史料室 2003. 3
- 「校歌」の史譜 大学史紀要 第七号
明治大学大学史料委員会 2002. 12
- 歴史編纂事務室報告 続 明治大学と学生 第二十四集
明治大学歴史編纂事務室 2003. 3
- 立教学院史研究 創刊号
「立教学院史研究」編集委員会 2003. 3
- 神奈川大学史資料集 第十九集 神奈川大学会議録(四)
大学資料編纂室 2003. 3
- 新島研究 第94号
同志社社史資料室第一部門研究 2003. 2
- 新島襄 生誕160年記念 遺品から見る新島襄—Neesima Room 第23回企画展—
同志社大学人文科学研究所以内同志社社史資料室 2003. 4
- 立命館百年史紀要 第十一号
立命館百年史編纂室 2003. 3
- 龍谷大学史報 Vol. 3
龍谷大学大学史資料室 2003. 3
- 桃山学院年史紀要 第二十二号
桃山学院年史委員会 2003. 3
- 関西学院史紀要 第九号
関西学院学院史編纂室 2003. 3
- 宇部高専四十年誌
宇部高専40年誌編集委員会 2002. 12
- 大学アーカイヴス 全国大学史資料協議会東日本部会会報 No. 27・28合併号
神奈川大学大学資料編纂室・中央大学大学史編纂課・東海大学文書課史料編纂委員会事務室 2003. 3
- 全国大学史資料協議会西日本部会会報 No. 14
会報担当幹事校 関西大学(年史編纂室) 2003. 5
- みんなみ50年 日本寄生虫学会・日本衛生動物学

会南日本支部 50周年大会記念誌
 日本寄生虫学会・日本衛生動物学会南日本支部
 50周年記念大会実行委員会 1997.10
 野間教育研究所紀要 第45集 大学史編纂と大学
 アーカイヴズ
 中野実 2003. 3
 DJIバイマンスリーレポート No.48~No.49
 国際資料研究所 2003. 1 2003. 3
 文明のクロスロード MUSEUM KYUSHU 第19巻・
 第3号~第4号
 MUSEUM KYUSHU編集委員会 2002. 6、2003. 2
 FUKUOKA UNESCO -45年の歩み- 略年小史
 第28号・別巻
 福岡ユネスコ協会 1992. 9

友魂 49の出逢い
 宇佐空要務会 1989. 7
 記念館だより 第29号~第30号
 旧制高等学校記念館・旧制高等学校記念館友の
 会 2003. 2、2003. 6
 青陵会会員名簿 第32号
 青陵会本部 2002.10
 会員名簿 青陵会 昭和37年12月 第23号
 青陵会本部 1962.12
 校友会雑誌 復刊 第一號 二十五周年記念
 福岡高等學校校友会 1947. 1

* 大学史・高等教育史、アーカイブ関係図書を中心に受贈
 図書の一部を掲載した。

大学史料室日誌抄録 (2003年1月~2003年6月)

1. 9 (木) 第30回九州大学史料収集・保存に関
 する委員会開催。
 平成15年度教官定員運用要望書提出。
 有馬學大学院比較社会文化研究院教
 授より史料寄贈。
 科学研究費補助金(基盤研究(B)(2))
 「大学アーカイヴズ機能についての
 基礎的研究-「大学改革」との関連
 において-」の一環として、矢田俊
 文大学院経済学研究院長(元副学
 長)にオーラル・ヒストリーを実施
 (2月18日、3月27日、4月21日も
 同様)。
- 1.14 (火) 大日本印刷より史料閲覧のため来室
 (『九州大学医学部百周年記念写真
 集』編集の件。1月22日、24日、2
 月14日、18日、25日、3月12日も同
 様)。
- 1.16 (木) 『九州大学医学部百周年記念写真
 集』編集会議(於大学史料室。1月
 24日も同様)。
- 1.29 (水) 川添昭二名誉教授より史料寄贈。
 上村弘雄名誉教授より史料寄贈。
 折田助教授、医学部百年史編集委員
 会に出席(於医学部。4月9日、5
 月28日も同様)。
- 1.30 (木) 医学部庶務掛より史料閲覧のため来
 室。
 水崎雄文氏(文学部卒業生)、史料
 調査のため来室。
- 1.31 (金) 湯川次義早稲田大学教授より九州帝
 国大学女子入学の件につき照会、史
 料送付。
2. 1 (土) 兼任教官発令(~2005.1.31)。
 佐伯弘次 大学院人文科学研究
 院助教授
 新谷恭明 大学院人間環境学研
 究院教授
 植田信廣 大学院法学研究院教授
 有馬 學 大学院比較社会文化研
 究院教授
 東定宣昌 石炭研究資料センター
 教授
2. 3 (月) 高橋正立福井県立大学教授より史料
 寄贈。
2. 6 (木) 国立公文書館より九州大学大学史料
 室利用規則等の件につき照会、回答。
 日本大学より九州大学農学部農芸化
 学科の件につき照会、回答。
- 2.13 (木) 理学部庶務掛より史料閲覧のため来
 室。
- 2.14 (金) 退官予定教官へ史料寄贈依頼文書発
 送。
- 2.17 (月) 大学院人間環境学府院生、史料調査
 のため来室(3月7日、13日、31日、
 4月2日、3日、6月12日、16日も
 同様)。
- 2.21 (金) 井上尚英名誉教授より史料寄贈。

- 高仁淑大学院人間環境学研究院助手、史料閲覧のため来室。
- 学務部学務課より旧制福岡高等学校生徒の件につき照会、回答。
- 2.24 (月) 青陵会 (旧制福岡高等学校同窓会) より大学史料室視察のため来室。旗野嘉彦大学院総合理工学研究院教授より史料寄贈。
- 2.27 (木) 富吉建周九州産業大学教授、史料調査のため来室。
- 2.28 (金) 『九州大学大学史料室ニュース』第20号刊行。
3. 1 (土) 『九大風雪記』復刻。
3. 3 (月) 末松壽大学院人文科学研究教授より史料寄贈。
3. 5 (水) 藤野清次情報基盤センター教授、史料調査のため来室。工学部庶務掛より末広忠介銅像 (八代目工学部長) の件につき照会、回答。
3. 6 (木) 富善一敏氏 (東京大学経済学部図書館文書室)、大学史料室視察のため来室。原澤高比古・井上喬氏 (青陵会会員) 来室、史料寄贈。押川元重大学教育研究センター教授来室、史料寄贈。
3. 8 (土) 『九州大学医学部百周年記念写真集』刊行。九州大学医学部創立百周年記念行事挙行 (折田助教授出席)。
- 3.10 (月) 「大学史料室への資料の寄贈について (お願い)」 (各部局等所蔵の行政文書の受け入れ依頼文書) 発送。
- 3.11 (火) 森祐行大学院工学研究院教授来室、史料寄贈 (4月23日、5月20日、22日、6月13日、25日、26日も同様)。西岡和男大学院医学研究院教授より史料寄贈。杉岡洋一名誉教授 (元総長) より京都帝国大学医科大学の件につき照会、史料送付。
- 3.15 (土) 折田助教授、福岡県立修猷館高等学校「土曜自己開発講座における出前講義」に出講 (「創設期の九州帝国大学」)。
- 3.25 (火) 根岸徹郎専修大学助教授、史料調査のため来室。
- 3.26 (水) 青木義和大学院理学研究院教授より史料寄贈。福岡進学情報サービス室より史料寄贈。
- 3.31 (月) 『九州大学大学史料叢書』第11輯、『九州大学大学史料室ニュース』第21号刊行。理学部庶務掛より史料寄贈。山口忠志大学院数理学研究院教授より史料寄贈。NHK福岡放送局より医学部附属病院等史料の件につき照会、回答。
4. 2 (水) 西日本新聞社記者、大学史料室視察のため来室。
4. 7 (月) 第31回九州大学史料収集・保存に関する委員会開催。平成15年度大学史料室振替要求書提出。本部事務局藤吉尚之総務課長、総務課白石寛治専門員、大学史料室視察のため来室。
- 4.12 (土) 折田助教授、2003年度日本医史学会総会及び学術大会に参加 (~13日。於九州大学医学部百年講堂)。
- 4.14 (月) 折田助教授、九州大学「新採用職員研修」において講演 (「九州大学の歴史—大学とは何か—」)。
- 江頭和彦大学院農学研究院教授より史料寄贈。
- 4.16 (水) 安井久喬名誉教授より史料寄贈。九州大学同窓会連合会より史料寄贈。2003年度前期「大学とは何か—ともに考える—」開講。
- 4.17 (木) 法学部図書掛より史料寄贈。
- 4.22 (火) 川東利男大学院理学研究院教授より史料寄贈。齊藤一馬氏 (青陵会会員) 来室、史料寄贈 (6月13日も同様)。
- 4.23 (水) 文化財ワーキンググループによる新キャンパス埋蔵文化財調査地 (石ヶ原前方後円墳等) の視察を実施 (折田助教授参加)。
5. 1 (木) 片山昌彦氏 (前教育学部等事務長)、再任用。兼任教官発令 (~2005.4.30)。荻野喜弘 大学院経済学研究院教授

- 文学部地理学研究室（高木彰彦大学院人文科学研究院教授ほか8名）より大学史料室見学のため来室。
5. 6（火） 小泉直彦氏（工学部卒業生、荒川文六元総長令孫）より史料寄贈。
5. 8（木） 第19回文化財ワーキンググループ開催（折田助教授出席）。
荒木見悟名誉教授より史料寄贈（6月27日も同様）。
- 5.12（月） 西村久名誉教授来室、史料寄贈。
- 5.13（火） 中野玲子氏より史料寄贈。
- 5.15（木） 井上洋子福岡国際大学教授、史料調査のため来室。
北海道大学総務課より大学史料室の組織等の件につき照会、回答。
- 5.16（金） 後藤賢一元教養部教授来室、史料寄贈。
- 5.19（月） 村山暁氏より史料寄贈。
- 5.20（火） 京都産業大学総務部広報課より「大学とは何かーともに考えるー」の件につき照会、回答（6月5日も同様）。
- 5.23（金） 東孝寛大学院農学研究院助教授（農学部同窓会）、史料閲覧のため来室。
- 5.26（月） 文学部学生、史料調査のため来室（6月4日、9日、11日、13日、16日も同様）。
- 5.28（水） チューリップテレビ（富山県）より九州帝国大学農学部卒業生の件につき照会、史料送付。
- 5.29（木） 古賀英俊氏（青陵会会員）来室、史料寄贈。
6. 5（木） 大森裕子氏（京都帝国大学福岡医科大学初代学長大森治豊令孫故大森陽氏夫人）、三村義雄氏（大森裕子氏令弟）来室、史料寄贈（有川節夫室長受領）。
- 小林晶・原寛氏（医学部卒業生）、大森関係史料寄贈式立ち会いのため来室。
6. 6（金） 田島寮寮祭実行委員（農学部2年生）史料調査のため来室（10日も同様）。折田助教授、九州大学経済学部同窓会福岡支部総会で講演（「九州帝国大学と法文学部の創設」。於西日本新聞会館国際ホール）。
- 6.11（水） 福井仁士名誉教授より史料寄贈。
- 6.13（金） 西日本新聞記者、取材のため来室。
- 6.16（月） 田中務・満武忠義氏（青陵会会員）来室、史料寄贈。
小野義秀氏より史料寄贈。
NHK金沢放送局より戦前期医学部関係史料の件につき照会、回答。
石井洋一名誉教授より史料寄贈。
多田功名名誉教授より史料寄贈（6月20日も同様）。
高柳素夫名誉教授より史料寄贈。
- 6.20（金） 塩川郁夫氏（元本学技官）・牛房忠夫氏（元本学事務官）、史料（写真ネガ等）貸与のため来室。
比較社会文化学府等事務部より史料受領（「九州大学大学教育研究センター」標札）。
東京水産大学附属図書館より、元本学教官の件につき照会、史料送付。
- 6.25（水） 学務課、研究協力課より史料移管（～26日）。
恒吉正澄大学院医学研究院教授より史料寄贈。
- 6.26（木） 前泊豊光沖縄県立図書館長、富永一也同資料課長、大学史料室視察のため来室。

九州大学大学史料室ニュース 第22号

発行日 2003年10月31日（年2回刊）

編集
発行

九州大学大学史料室

〒812-8581 福岡市東区箱崎6-10-1

電話・FAX (092) 642-2292

Kyushu University Archives

印刷 株式会社ミドリ印刷